

時、シリア地方には珍らしからぬ事なり、暗黒は三時間續きぬ、突然聲あり、十字架より發す、曰く、『わが神わが神何ぞ我を遺てたまふや。』こは詩篇第廿二篇第一節の辭なり、蓋し耶蘇の愛誦せられしものならん、然れども耶蘇は其の内容を深められぬ、耶蘇は人類の罪の犠牲となりて、十字架上に釘けられしものから、人類の罪の如何に沈痛にして神に戻れるかを悲しみ、自ら人類の罪を負へる如く感じ、罪ある人類の代表者として神に罰せられし如く想はれ、その心鏡曇りて神の面影を鮮かに寫さるに至りしものから、この辭を口にせられしならん、十字架の寂寥は此處に極まりぬ、耶蘇は此の辭をば希布來語にて『エリ、エリ、ラマ、サバクタニ』と言はれぬ、猶太人は其の叫聲を理解せしかども、羅馬の兵卒は其の意を解せず、エリなる一語を捕へて、エリヤを呼ぶにやと解しぬ、然れども彼等は昔の預言者なるエリヤを知れるにあらず、エリヤは猶太にて普通の名なれば、耶蘇がエリヤといふ友を呼びし位に想像せしならん、熱風面を吹いて耶蘇の唇は渴きぬ、耶蘇は『われ渴く』と言はれぬ、この時耶蘇の心は既に平靜に歸せり、靈の苦は既に癒えしかば、肉の缺乏を意識せら

れぬ、兵卒の一人は海絨ウニに醋酢を含ませ、之を葦の端につけ、差上げて耶蘇に飲ましむ、これよりして耶蘇の肉は益々弱りぬ、即ち大聲にて曰く、『父よ我靈を爾の手に委ぬ』詩篇第三十一章五節の辭なりこは凱旋の叫びなりき、耶蘇は世の罪を負ふ神の羔として神と人とを合一する新約の血を注がれしなりき、耶蘇の事業は完成せられぬ、神に遺てられたりとの意識より、その靈を神に委ぬるまでの耶蘇が内心の經驗を思へば尊く、その間に天地は一變せしなりき、耶蘇は最後に『事了りぬ』とて首を垂れたまひぬ、耶蘇の使命は、茲に完うされしなり。

耶蘇の最期の狀は周圍に立てる者の心を驚嘆せしめぬ、百人の長は神を崇めて曰く、『誠にこは義人なりき』その他心ある者は皆深き想ひに沈みて家路に就きぬ。

この日は備節日モサドにして且つ安息日の前日なり、故に屍を十字架の上に置くを欲せず、人々ピラトに乞うて其の屍を取除かんとす、兵卒等は其の生きんを恐れ、二人の盜賊の脛を折りしが、耶蘇の既に死せるを見て其の脛を折らざりき、一人の兵卒槍を以て耶蘇の脅を刺ぬきしに、血と水と流出せしといふ。

耶蘇の十字架をば信實なる婦人等と共に遙かに見たる人々の中に、アリマ
 タヤのヨセフあり。彼は秘かに耶蘇の弟子となれる敬虔なるイスラエル人な
 り。彼は集議所の宣告を如何ともする能はず、耻辱と悲痛に胸塞がりしなるが、
 耶蘇の屍を鄭重に埋葬せば、せめてもの心癒せと思ひ、ピラトの許しを乞うて、
 刑場より屍を運び出しぬ。夜間耶蘇を訪へるニコデモも亦没藥と蘆薈をまぜ
 しもの百斤ばかりを持ち來る。而して耶蘇の屍を猶太人の葬式に従ひて、布と
 香にて包める後、十字架の近傍の園の中、磐をほれる痕、己が新しき墓にとて用
 意せる所に安置し、大なる石をもて墓の入口を塞ぎぬ。婦人等は其の憐れなる
 埋葬を終りまで見届けぬ。斯かる悲惨の始終を靜かに見たるは、男の弟子にあ
 らずして、女なりしこそ趣味深けれ。

第六章 復活

耶蘇の死は弟子達にとりて重き悩みなりき。救世主たる者如何にして斯か
 る最期を遂げしや。彼等の信仰は根柢より搖ぎぬ。若し耶蘇の復活なかりせば

基督教は水の泡と消えしならん。弟子達が復活の主を見たりとの事實、これは初
 代基督教の生命にして、又永遠に基督教の死活問題たるべし。

屍を埋葬して三日間猶太人は墓に詣づるの慣習あり。されど弟子等は耶蘇
 の墓に就いて何等の考を費さず。墓に詣てんなどは想ひもよらぬ事なりき。彼
 等は耶蘇が何故果敢なき最期を遂げられしやとの問題に頭を悩ませり。され
 ど忠實なるは婦人なり。マグダラのマリヤは他の婦人を伴ひて、朝なほ明けや
 らぬ頃、耶蘇の墓に詣て、懐かしき主を偲べり。三日目の曉のことなりき。視よ重
 き石は、轉ばされて、屍は其處にあらざるに非ずや。マリヤはペテロとヨハネの
 許に走り往き、墓より主を取りし者ありといふ。ペテロとヨハネは此の報知に
 胸つぶれて墓に走る。ヨハネは若年なり。ペテロより疾く走りて先づ墓に至り
 ぬ。思慮深く冥想的なるヨハネは、俯して屍を包みし布を見、如何にして屍はあ
 らざるかと奇怪の念に我を忘れて、墓に入らんともせざりき。ペテロは後れば
 せに來りて先づ墓に入る。視よ首をつゝみし手巾と屍を包みし布とは何れも
 たしみて別に置かれぬ。屍は盗まれしや。これ第一に起れる彼等の疑惑なりき。

されどヨハネは既に主復活よみがへりしにあらずやとの想ひ微かに白みぬ。されど其れをペテロに語るべくも非ず、二人は黙して己が宿に歸り行きぬ。

マリアは尙ほも墓の側にありて泣けり。彼女は若しやと想うて再び墓を覗きぬ。この度は、視よ、二人の天使白衣を纏ひて耶蘇の屍のありし處に居るにあらずや。天使はいふ、婦よ何故に泣くや。マリアは答ふ、我主を取れる者あり、何處に置かれしを知らず。天使はマリアの背後うしろにある者に目を向けぬ。そのためマリアは振向きぬ。一人の男そこに立てり。男は曰く、婦よ何ぞ泣くや、誰を尋ぬるや。マリアはその園丁ならんと思ひ、君よ彼の移されし處を知らざるや、知らば我に告げよ。マリアよと耶蘇はいふ。そは充分にマリアの衷情に透徹しぬ。マリアは「師よ」と答ふ。愛する心は愛する心と感應す。如何に其の親しきことよ。マリアは耶蘇に手を觸れんとせり。耶蘇曰く、「我に觸るゝ勿れ、我未だ父にのぼらざればなり。わが兄弟に往きて言へ、我は我が父即ち爾曹が父わが神即ち爾曹が神にのぼると。マグダラのマリアは急ぎ歸りて、之を弟子達に告ぐ。衆人愕然たり。未だ俄かに信ぜず。」

同じ日の午後二人の弟子はエルサレムより七八哩隔れるエマオ村に旅せり。一人はクレオバといふ。他の一人の名は記されず。二人とも使徒にあらざり。二人は耶蘇の十字架より今朝起れる事までも談論せり。その話には愁を帯べり。耶蘇は彼等と偕に歩みしかど、彼等の眼明らかならず、それと知る能はざりき。耶蘇はいふ、「爾曹歩みつゝ悲しげに談論するは何事ぞ。」クレオバは答ふ、「爾はエルサレムの旅人にして此の事を知らずして過ぎしや」とて、耶蘇の受難及び其の復活の風評あるを語る。彼等は話に氣を奪はれて早くもエマオに近づきぬ。耶蘇は往き過ぎんとす。二人は彼を引留めて、既に日傾かたむきて黄昏ぬ。我儕と共に留れといふ。耶蘇は留りぬ。共に食せんとする時、パンを取り神に謝して之を分たれしかば、二人の者忽ち目瞭かになりて其の耶蘇なるを認めしが、又忽ち其の目見えずなりぬ。彼等互に言ひぬ、「途にて我儕と語り、且つ我儕に聖書を説明せられし時、われらの心熱せしにあらずや。」

二人は忽ちエルサレムに引返しぬ。十一人の使徒その他の者に語るに實を以てせんとす。然るに彼等の語らざる前集まれる者共一聲に挨拶して「主實に

甦りてシモンに現はれたり」と云ふ。このペテロに現はれしことは保羅も亦記せり(哥林前五)されど如何なる状態なりしか。ペテロは主との會見を秘密に保てる如し。今や二人は又己等に現はれたる事實を語りぬ。その時しも耶蘇は彼等の中に立てるを視ずや。爾曹安かれ」と言はる。一同片唾を呑みて熟視しぬ。幽靈ならんと危ぶめり。耶蘇は彼等の駭き懼るゝ状を見て、曰く、「爾曹何ぞ駭くや。何ぞ心に疑ふや。」斯く言ひて其の手と脅とを彼等に示さる。弟子たちは皆歡喜に溢れぬ。

耶蘇の現はれし時使徒の一人雙兒ユダのユダは不在なりき。彼は懷疑的の性質を有せり。他の使徒が主を見たりと云ふを信ぜずして曰く、「我もし其の手に釘の跡を見、わが手を以て釘の跡にさはり、わが手を以て其の脅にさはるに非ずんば信ぜず。」その後十八日十一人の使徒は密室にありて談論せり。門は閉ぢてありき。耶蘇は其の中に現はれて曰く、「爾曹安かれ。」耶蘇の此の時現はれしは、懷疑者の信仰を醒ましめたる一匹の羊を尋ねんためなり。雙兒に向つて曰く、「爾の指を伸べて我が手を見、爾の手を伸べて我が脅にさせ、信ぜ

ざる勿れ、信ぜよ。」雙兒は懷疑の深谷より信仰の絶頂に飛上りぬ。「我主よ我神よ」と叫ぶ。耶蘇は徐かに答ふ、「爾われを見し故に信ず、見ずして信ずる者は福なり。」耶蘇は尙ほ使徒等に訓戒すべき多くの事を有しぬ。されど敵地たるエルサレムにあらざ、懐しき故郷ガリラヤに於て現はれたまひしは、樓上の室にて預言されしが如し(馬太廿六)。事實は次の如し。或る夜のこと、七人の使徒は會合しぬ。恐らくペテロの家にてありしならん。常に指導者にして激し易きペテロは突然言ひぬ。「我儕漁りに往かん。」蓋し悶々の情を癒さんとせしならん。その時集まりしはペテロの外雙兒ユダ、タルマイの子ナタナエル、ヤコブ、ヨハネ及び他の二人にてありき。彼等は皆ペテロの議に賛す。舟をテベリア湖に浮べしが、その夜は何の獲物もなし。夜はやがて明けぬ。耶蘇は岸に立ちぬ。されど弟子等は其の耶蘇なるを知らざるなり。彼等の舟は岸より約五十間餘の所にあり。耶蘇は漁夫に挨拶する商人なる如く、彼等に聲をかけて曰く、「小子等よ、魚を獲しや。」彼等は「否」と答ふ。耶蘇曰く、「網を舟の右に撒てよ。獲物あらん。」彼等は其の言ふ如くせしに、魚あまりに多くして引上ぐる能はず。茲に於て思慮に富めるヨハネ

はペテロに呼いて曰く、「これ主なり」ペテロは主なりと聴くや否や裸體なりしが衣をつけ、帶して湖に飛入りぬ。性急なるペテロが衣を纏ふだけの餘裕を有せしこそ面白けれ。他の弟子等は魚の入れる網を舟もて曳きつゝ岸に至れり。上陸せる時彼等は既に火の上にかざせる魚とパンの備へあるを見出せり。耶蘇は今獲たる魚を少し持來れと彼等に告ぐ。命を聽くや直ちに應ずるは常にペテロなり。彼は網を岸に曳來れり。網の中には大なる魚百五十三尾ありしかど、網は少しも裂かれざりき。耶蘇は彼等に來りて食せよといふ。斯くしてパンと魚とを彼等に與ふ。

食の終れる時耶蘇はペテロに向はれぬ。これ大言壯語の舌の乾く間もなく、三度主を知らずといへるペテロなり。耶蘇は彼の心を試むる必要を感ぜられぬ。曰く、「ヨナの子シモンよ、爾はこれらの者にまさりて我を尊ぶや。」尊ぶとは、ペテロの主に対する愛情を言ひ現はす語にあらざり。ペテロは答ふ、「主よ、然り、わが爾を愛するは爾の知れる如し。」耶蘇曰く、「我が羔を牧へ。」やがて二度ペテロにいふ。「ヨナの子シモンよ、我を尊ぶや。」主よ、然り、わが爾を愛することは爾自ら知れ

り。「耶蘇曰く「我が羔を牧へ。」而して又三度ペテロにいふ。「ヨナの子シモンよ、我を愛するや。」尊ぶかは愛するかに變ぜり。ペテロは耶蘇が語を正されしを見て、尙ほ一層憂愁を増しぬ。答へて曰く、「主知らざる所なし。我爾を愛するは爾の知る如し。」

耶蘇は三度斯く問うて、ペテロの常の輕卒なる決心をなすことを誠しめて曰く、「我が羊を牧へ、誠にまことに爾に告げん。爾幼なき時自ら帶びし、心のまゝに歩きぬ。年老いては爾手を伸べて人爾をくゝり、心の欲せざる所に曳き往かん。」耶蘇の斯く言へるは、ペテロの十字架に死せんことを預言されしなり。

ペテロとヨハネは使徒の最大なるもの、ペテロは耶蘇の己が事のみ誠しめられ、ヨハネに就いて一言もせられざるを怪しみ、顧みてヨハネを眺め、耶蘇に問うて曰く、「主よ、この人は如何に。」耶蘇はペテロを難じて曰く、「我もし彼が我が來るまで生存するを欲せば、爾に何のかゝはりあらんや、爾は我に従へ。」他の弟子等はヨハネが耶蘇の榮光を以て再臨するまで生存すべきことを告げられしならんと想へり。されど實は耶蘇が斯かる謬想を非難せられ、忠實に従ふべ

きことをペテロに教へられしに外ならず。ヨハネの信仰は耶蘇の疑はざりし所と見ゆ。

その後耶蘇はペテロとハヨネを山に導きて祕密の會見をなされぬ。その状態は知るに由なし。その他保羅は耶蘇が五百人の兄弟に現はれ、又主の兄弟ヤコブに現はれしことを記せり(哥林前十五ノ六、七)而して又十一人の使徒に現はれて、萬國の民に福音を傳ふべきことを命じ、世の終りまで人類と共に在ることを告げられぬ。あゝ基督の復活!! 是は奇蹟中の奇蹟なり。されど保羅はこれを説明して曰く、「愚なる者よ、爾が播くところの種先づ死ざれば生きず、又爾が播く所のものは後生ゆる所の體を播くに非ず、麥にても他の穀にても只粒のみ：死にし者の甦るも亦斯の如し。壞る者にて播かれ、壞ざる者に甦され、……血氣の體にて播かれ、靈の體に甦さるゝなり」(哥林前十五ノ四、十)神の智識の富は深し、焉ぞ人の愚かを以て測度すべけんや。

基督終

大正十二年七月十日 三十五版印刷
大正十二年七月十五日 三十五版發行

基督
【定價壹圓八拾錢】

不許複製

編著者	松本雲舟
發行者	東京市神田區表神保町壹番地 築瀬富次郎
印刷者	東京市小石川區金富町十五番地 樋口治郎
印刷所	東京市小石川區金富町十五番地 星光舎印刷所

發行所

東京市神田區表神保町壹番地
會社資 三星社出版部
電話神田 四〇六一番
振替東京 四七〇二三番

三 星 社 發 行 圖 書

永井一孝 竹野長次 兩先生著	徒然草新釋	三六判 ロース製	定價金壹圓五十錢 送料十二錢
永井一孝 竹野長次 兩先生著	增鏡新釋	三六判 ロース製	定價金壹圓五十錢 送料各十二錢
同	同 合 本	三六判洋 裝箱入	定價金參圓也 送料十八錢
早稻田大 學教授 永井一孝先生著	枕草紙新釋	三六判 ロース製	定價金壹圓五十錢 送料各十二錢
同	同 合 本	三六判洋 裝箱入	定價金參圓也 送料十八錢
竹野長次先生著	方丈記新釋	三六判 並製	定價金三十八錢 送料六錢
藤卷櫻邨著	竹取物語新釋	三六判 並製	定價金三十八錢 送料六錢
大町桂月先生著	文章軌範	三六判洋 裝箱入	定價金壹圓八十錢 送料十二錢

324
107

終

